# 自分は何のためにここにいるのかを常に問う

## 張笑男

Cho Syonan

ちょうしょうなん。経済学部総合経済学科金融システム講座・助教。中国・山西省生まれ。13歳で来日し広島市の公立中学、高校で学ぶ。2007年京都大学法学部卒業、2013年京都大学法学研究科法制理論専攻博士課程そのほか。昨年度より現職。

### 法律の学習は専門用語の正確な理解が前提

この春新しくスタートした多文化社会学部に限らず、長崎大学には外国人の教員が多く在籍しています。昨年度から経済学部で商法を教えている張笑男先生も中国は山西省の出身。珍しいお名前です。

「名前から察して男性だと思い込んだ方には、会うとびっくりされます。なかには、『ニューハーフですか?』と聞かれたりして、こちらも『そうですよ』なんて冗談で答えることもあります(笑)。中国でも、女性にこういう名前をつけるのは珍しいですね」。

流暢な日本語は十三歳で来日してから身につけたというから、さらに驚愕です。

「広島の公立の中学に編入されたのですが、英語や数学、理科は、なんとか理解できました。問題は国語と社会。個別授業で平仮名から教わりました。まだ子どもだったので案外すんなり頭に入って来ましたよ」。

今ではどちらかといえば中国語より日本語の方が話しやすいとも。講義も日本語なのだそうです。

「法律の世界は、専門用語を正確に理解していることが学習の前提条件です。私の専門は民事法学、なかでも会社法です。『株式』『定款』など、学生にとってはこれまであまりなじみのなかった概念が頻繁に登場しますから、いかに正確に理解してもらうかが重要です。私の悪いくせで、つい書き言葉をそのまま話してしまうので、わかりやすい言葉に置き換えることを、もっと意識しないといけません」。

専門誌には、中国の会社法に関する論文も書かれていますね。

「はい。民事法分野の研究者は日本法に加えて、欧米など外国の民事法も研究する方が多いのです。そもそも日本の法律は明治期に西洋のものを参考にしたからでしょう。私はアメリカと中国を選んで、研究しています。中国の会社法は、一九九〇年代にできたばかりで、法整備が遅れている部分もあります。例えば日本の企業で中国への進出を考えたとき、それではかなり不安ですよね。この分野の法整備が両国の経済界にとって大きな意味を持ってきます。中国も国際競争のなかで社会が急速に変化しており、情報収集が非常に大切です。それで、ときおり中国に行ってあちらの研究者と会って情報交換もするんですよ」。

自称・超インドア派。趣味は記念切手・記念硬貨収集。「外を出歩くのが苦手なんです。家の中にいるのが一番ですね。読書・料理も好きですよ。先日は3時間以上かけて手羽先の揚げ物を作ったんですが、あとでデパ地下で1本90円で売っているのを発見して、がっかりしました(笑)」。

### 日々の生活は取捨選択 何を取って何を棄てるか

それにしても学生に囲まれていると、ほとんど見分けがつきません。

「十歳くらいは違いますよ〜。でもみんな素直で可愛い。学生の皆さんには、わからないことは自分で調べる能力を身につけてほしいですね。特に、情報源の信憑性をちゃんと確認する、そのために図書館や、我々教員を上手に使ってくれれば…。大学は人に出会って経験を積む場です。私自身も、いい先生方に出会い育ててもらったので、今があります。ただ、学生のうちはいろいろなことが魅力的に見えてしまいますよね。勉強以外でも、人づきあいとか、遊びとか、バイトとか。そんななかで、自分は何のためにここにいるのかを意識する方がいい。日々は取捨選択です。どれを取ってどれを取らないか」。

自分は何のためにここにいるのか。なるほど、日々の生活のなかでは、つい見失ってしまうことですね。張先生のような経歴の方が、今、長崎大学にいらっしゃる意義も、きっとこれから大きくなりそうです。

「長崎は、中国との交流の歴史があって親しみがわきますね。ランタンフェスティバルも今年初めて行きました。子どもの頃の中国の記憶では、春節といっても爆竹を鳴らしてお祝いするくらいだったから、なんだか不思議な気分でした。食べ物では、サバの美味しさには驚きました。私は青魚アレルギーですが、美味しいので、ついつい忘れて食べてしまうくらい。ちゃんぽんは……実はまだ食べたことありません。私の生まれた山西省の麺類は汁がないのが普通でしたから、汁があって量が多いちゃんぽんを、食べる勇気がない(笑)」。

先生の長崎生活は、始まったばかり。これからたくさんの英知を学生に授けながら、プライベートでも長崎文化を堪能してほしいですね。

まずは、ちゃんぽんから……?

働くウーマン奮戦記

## 大学はわたしの仕事場 6

長崎大学で働く女性教職員の活躍ぶりを毎回お一人ずつ紹介します。ステキな先輩たちの後ろ姿を見て女子学生も何かを感じて欲しい。そんな願いをこめたコーナーです。